

『生きる力を育てる幼児教育の創造

教職員の資質・専門性の向上を目指して～自己課題に向けて主体的に取り組む研修～』

＜名古屋希副主幹 講話＞

- ・今年より始まった第4次浜松市教育総合計画では、基本理念のもと「主体性」「多様性・包摂性」「信頼・協働」の3つのコンセプトが設定されている。目指すこどもの姿は「自分らしさ」を重視しており、こどもが自他の「自分らしさ」を大切にしていけることは、他者を認め、協働しながら高め合い、補うことにつながっていくと考える。
- ・幼児期に育てたい力を踏まえ、幼児期にふさわしい学びを遊びや生活の中で行っていくことが、資質・能力の育成につながる。浜松市版「つながる」カリキュラム参考資料も活用しながら、幼児教育と小学校教育がつながっていくために、系統性を押さえた保育を行うことを意識して欲しい。
- ・幼児教育は環境を通して行う教育である。特に、人的環境としての教師の役割は大きい。教師の役割を意識し、保育の質の向上に努めて欲しい。



＜グループ協議 Aグループ：幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）を活用したこどもの姿の読み取り＞

- ・浜松市版「つながる」カリキュラム参考資料の活用について話した。また、遊びの様子の写真から、10の姿を読み取り、教師のねらいや環境構成について話し合い、保育を振り返る方法を学んでいく。

～助言者御指導（抜粋）～

- ・10の姿は、幼小接続と2030年以降の時代を生きるために必要な力を明確に表現するために示された。根拠に目を向け、深く知ることが大切である。
- ・10の姿は、幼児期にふさわしい経験や遊びを通して何が育つのかを示した具体例である。それを通して、小学校の先生と一緒にこどもの姿や教育構想を共通理解していけるとよい。
- ・こどもが没頭している姿を10の姿で読み取ることで、保育の充実につながる。
- ・保育では豊かな体験を大切にしたい。こどもは同じことをしていても、それぞれに経験している内容は異なる。その視点を持ち、こどもを理解し、興味や関心を追求できるような環境を考えていくとよい。

＜グループ協議 Bグループ：豊かな表現活動を展開するための知識や技能の向上＞

- ・こどもの自由表現を引き出すための絵画遊びの導入や用具の出し方、一人一人が楽しめる表現遊びの工夫を学びたい。
- また、体幹の弱さや動きがぎこちないこどもが増えているため、発達段階に合わせた動きや体幹を刺激するリズム遊びなどの指導の仕方を学んでいく。



～助言者御指導（抜粋）～

- ・教育要領5【感性と表現に関する領域「表現」】の部分を再度読み返すと、見えてくるものがある。
- ・こどもは自らの内面や周囲の世界を様々な方法で表現しながら、豊かな感性、創造力、コミュニケーション能力、協調性や社会性など、様々な力を身に付けている。
- ・絵、工作、歌や音楽、身体表現以外に、言葉も表現のひとつである。こどもが一生懸命言おうとする姿に寄り添い、耳を傾けて聞こうとすることを意識してほしい。
- ・教師自身がこどもと共に表現することを楽しむことが、こどもたちの豊かな表現活動につながる。

＜グループ協議 Cグループ：年齢や発達に合った遊びの進め方＞

- ・発達に合った集団遊びやごっこ遊びの進め方、その際の環境の出し方や再構成、教師の介入のタイミングについて学びたい。少人数クラスでの集団遊びの取り入れ方や展開の仕方についても学んでいく。

～助言者御指導（抜粋）～

- ・幼児期は、身体諸機能が著しく発達する時期である。身体機能の向上には、「思わず体を動かしたくなる環境」と「運動的な遊びを十分楽しめるタイミングの良い援助」が大切である。
 - 教師による楽しい雰囲気作り
教師が夢中で楽しむ姿や集中して取り組む姿などを見せ、憧れのモデルとなる。
 - 多様な動きを意識した遊びの環境作り（走る、引っ張る、投げる、回る など）
 - 個の実態を把握し、遊びを楽しむ中で偏りなく様々な動きを経験できるように工夫して環境を構成する。（学期ごとに個の実態を振り返り、今後の見通しをもつ。）
 - 教師や保護者による褒める、認める関わり
できたことや頑張った過程を、褒めたり認めたりし、自己肯定感や意欲を高める。

＜グループ協議 Dグループ：幼児理解と豊かな学びを支える保育の充実＞

- ・こどもたちの育ちや学びにつながる環境作りに課題を感じている。また、多様化しているこどもたちを理解し、どのように保育を充実させていくか、こどもの遊びや学びを読み取る力を学んでいく。

～助言者御指導（抜粋）～

- ・こどもに関わる時には、思いをたくさん引き出し、認め、良い所をたくさん見つけていく。
- ・幼児教育は、幼児理解に始まり幼児理解に終わると言われている。幼児理解に必要な心構えとして、肯定的に見取る、目に注目する、何を面白いと感じているのかを考えることが大切である。
- ・豊かな学びを支えるために、遊びを通して、「知識及び技能の基礎」「思考力・判断力・表現力の基礎」「学びに向かう力・人間性等」の3つの資質・能力を培い、小学校以降の育ちにつなげることが求められている。

＜グループ協議 E グループ：発達支援教育の理解＞

- ・幼児理解や支援方法、保護者への対応の仕方、職員間での連携方法について課題が挙がり、情報共有をした。内面理解が適切な支援につながることを話し合い、具体的なエピソードから、幼児理解を深める手立てを学んでいく。

～助言者御指導（抜粋）～

- ・学びたいことを個々が明確にして参加し、課題に対するヒントを一つでも持ち帰ることができるとうい。
- ・学級運営において「インクルーシブ」という言葉が定着してきた。特別に支援を要する子だけでなく、一人一人に合った支援や配慮をしていくことが大切である。
- ・早期療育は、早ければ早いほど効果が出やすい。こどもの表れが「少し気になる」と感じたタイミングで巡回支援事業を積極的に活用し、適切な支援につなげたい。
- ・どの保護者とも良い関係が築けるよう、今一度自分の姿を振り返り、日頃から保護者とのコミュニケーションを密にしながら信頼関係を築いていく。

＜グループ協議 F グループ：外国人支援について（保護者対応・こどもに対する支援）＞

- ・外国籍の保護者への伝え方や対応に関しては、共通の悩みをもっている。実践事例を持ち寄り、コミュニケーションの取り方やこどもの様子の伝え方などを学んでいく。



～助言者御指導（抜粋）～

- ・外国人支援は、国の施策や教育基本法などの法的根拠に位置づけられており、今後の浜松市における外国人や外国にルーツをもつ園児の増加などを見据えた上で社会的ニーズとして捉えていくとうい。
- ・幼稚園は、生活全てが遊びであり、付随的学習のチャンスがあふれている。言語の獲得において、幼児期からの適切な支援が鍵となる。
- ・幼稚園で幼児が日本語習得するためのポイントは、こどもがリラックスした状態であること、教師が笑顔で好意的に接すること、予測的発達水準を意識した上で行うこと、口元を見せながら行うことなどが挙げられる。
- ・外国籍児が在園することは必然と捉え、好意的に受け止めることが大切である。「〇〇さん」と名前で呼んだり、互いの文化の違いを尊重したりしていくと、保護者ともつながりやすい。
- ・保護者への手紙や話し方は、シンプル（ゆっくり簡潔に）・ビジュアル（絵や写真、動画等を活用）・シェア（情報共有）を心掛けたい。また、関係のないイラストなどの情報は、省くことが有効である。

＜グループ協議 Gグループ：少人数園、複式学級の保育の進め方＞

- ・少人数園では、少人数での保育の進め方や学年の発達や育ちの確保の難しさ、複式学級では、異年齢保育での環境の出し方や関わり方、職員の連携が課題として挙がった。
- 環境構成や週日案の共有や教材研究、写真やエピソードを用いた、保育実践について話し合いを行い、少人数保育や異年齢保育の進め方について学んでいく。



～助言者御指導（抜粋）～

- ・こども家庭庁が策定した「はじめの100か月の育ちビジョン」の中で、「安心と挑戦の循環」が重要視されている。こどもと安定した関係を築き、安心できる関係がベースにあることでこどもの意欲が生まれ、自ら周りの環境に働き掛け、挑戦できる。そして、「安心と挑戦の循環」が生まれるために、こどもの声を聴くこと、主体性を大切にすることが教師に求められる。
- ・環境や援助で迷う時は、ねらいを再確認する。ねらい達成のための手段が遊びであり、どんな環境や遊びを設定すると、ねらいが達成できるかを考えることが大切である。

＜グループ協議 Hグループ：園運営が円滑に進むためのマネジメント＞

- ・「法令や規定などに基づいた園運営」「園の実態や状況」という2つの課題をもとに、職員の実情に寄り添ったマネジメントについて、話し合いたい。また、主任としての役割を意識し、どう取り組むか考えながら、園評価の仕方や職員間をつなぐ役割として有効な方法を学んでいく。

＜グループ協議 Iグループ：保育推進のリーダーとしての助言力の育成＞

- ・それぞれの立場でどのように保育を引っ張っていくか、主体性を尊重しながらの助言方法など、自己課題解決に向けた実践を積み重ねていく。「3学年の週案や保育の刷り合わせを行い、成果と課題の共有をする」「目指すこどもの姿を教師に置き換え、自身の保育の意味付けや価値付けをする」を具体的な研修方法としながら、保育リーダーとしての助言方法を学んでいく。



～助言者御指導（抜粋）～

- ・主任として、地方公務員法や教育公務員特例法などの法令について知識を深めてほしい。
- ・各園の現状を認識し、理念に基づき効果的・効率的な園運営を具体化するためのアセスメント能力やファシリテーション能力など、マネジメント能力が求められる。
（育成指標改訂に見る園経営の方向より）
- ・互いの強みを尊重し、学び合い、目標達成に向け、成長し続ける職員組織作りをしていく。また、職員を大切にすると共にミドルリーダーを育てていく必要がある。